

透析施設最前線 Vol.3

HOSPYグループ あしたの丘



あしたの丘

所在地 : 名古屋市天白区八幡山746-1

看護師数 : 4名

透析患者数 : 20名



新生会附属診療所

所在地 : 名古屋市天白区八幡山746-1

透析台数 : 20台

看護師数 : 2名

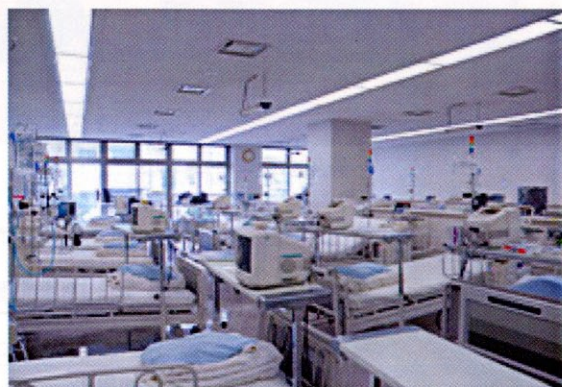
CE数 : 2名

患者数 : 25名

■ 家庭にしているような生活を基本とした心のふれあいを大切に

名古屋市天白区の緑豊かな住宅街にある「あしたの丘」は、内部障害者更生施設「新生学舎」(1976年設立)を前身とし、1995年4月に身体障害者療護施設として生まれ変わる際に、現在の施設名に変更された。

あしたの丘には、重度の身体機能障害があって常に介護を必要とする方、血液透析を必要とする内部障害の方が生活しており、施設内には医務室と血液透析が行える診療所(新生会附属診療所)が備わっている。「自分も楽しく、みんなも楽しく！」を合言葉に、家庭生活を基本にした心のふれあいを大切にし、利用者とスタッフがともに助け合い、楽しみながら生活する施設の実現を目指している。



透析室

■ 入所利用者の3分の1が末期腎不全患者

あしたの丘の入所利用者が抱えている主な障害および疾患は、先天性障害(脳性麻痺など)、後天性障害(脳血管障害など)、内部障害(末期腎不全)の3つに大別される。スタッフを3グループに分け、障害ごとに1年間はスタッフを固定して介護にあたるため、継続性のある内容の充実したケアが提供できるという。入所利用者60名のうち20名が末期腎不全による血液透析を必要としているが、その20名は腎不全の他にも体幹機能障害、知的障害、視聴覚障害、認知症など重複した障害を持っている。

あしたの丘のように透析患者さんが入所できる身体障害者療護施設は非常に少なく、同施設を含めて全国に2施設しかない。徳井看護主任は、「あしたの丘は施設内に診療所があるため、入所利用者は医療が受けやすく、館内を移動するだけで透析も受けられます。HOSPYグループ内の病院とも連携していますから、障害が重い方でも安心して生活できると思います」と、同施設ならではのメリットについて語った。



徳井久子看護主任

■ 看護師は施設利用者の日常生活を看護・保健面から支援

あしたの丘は療護施設であり、入所利用者の生活の場であることから、全スタッフのうち、生活の支援を行う介護スタッフは30名と多く、他は看護師4名、栄養士1名、理学療法士1名で構成されている。

同施設における看護師の役割は、利用者が障害を持ちながらも健やかに暮らせるように支援することで、看護と保健の両面から健康管理を行っている。看護師の主な業務は、入所利用者の健康状態の把握、異常の早期発見、内服薬や経管栄養の管理などの医療処置、病院受診の付き添い、嘱託医の診療や歯科検診時の介助などである。また、医療機関に入院する際には、利用者の状況を把握して、家族や病院スタッフに連絡をとり、退院時は施設での生活が可能かどうかを評価し、医療機関側のスタッフと話し合いも行うという。常に介護スタッフをはじめ、栄養士、理学療法士と情報交換を行い、利用者が健やかで快適な生活が送れるよう支援している。徳井看護主任は、「透析患者さんは状態が不安定なことが多く、透析室から戻った後に血圧が下がり過ぎることもあります。そのため、私たち看護師は、透析患者さんの一番近くで常にケアを行っている介護スタッフに、日常的に起こりうることを予測して伝えています」と、介護スタッフとの連携の重要性を強調した。

■ 介護スタッフへの透析に関する教育

あしたの丘では、介護スタッフに透析に関する教育を行うのは看護師の役割である。新しく入職した介護スタッフには、学習会を開いて必ず透析医療の概要を説明するとともに、透析医療で用いられる専門用語についてもわかりやすく解説し、介護スタッフが透析について具体的なイメージを持てる学習会を心がけている。徳井看護主任は、「学習会で透析患者さんはなぜ水分を制限しなければならないのか、体重が増えるとどうなるのかを説明したところ、介護スタッフから、お茶のコップを小さいものに変えてはどうかなど、生活の中でできる工夫を提案してくれました」と事例を紹介し、学習会によって介護スタッフの意識や行動に変化があらわれたことを指摘した。

シャントトラブルへの対応方法などについては、『透析ハンドブック』（編集：新生会第一病院教育訓練センター）の内容に基づいて指導している。過去にシャントトラブルを経験した介護スタッフもいることから、体験談を語ってもらうこともあるという。徳井看護主任は「あしたの丘を開設した当初の話ですが、外シャントのボディチューブの接続部がはずれ、介護スタッフが必死にボディチューブをつまんで一命をとりとめたというアクシデントもあったそうです」と述べた。また、トラブル時の対応方法を図式化したものを透析患者さんや介護スタッフの部屋に掲示したり、介護スタッフ同士の学習を行ったりして、日頃からトラブルにすぐに対応できる体制づくりに注力している。

■ 栄養士が中心となって透析食のポイントを指導

食事については栄養士が中心となり、介護スタッフに透析食のポイントを指導している。あしたの丘の利用者の食事は、昼食と夕食がバイキング形式となっており、その日の気分や体調に合わせて、好きなメニューを選択することができる。透析患者さんの食事は定食が基本だが、栄養士から指導を受けた介護スタッフが、透析食として適切なメニューを利用者といっしょに選択するなど、食事が楽しくなるような支援を行っている。徳井看護主任は、「透析患者さんに選んで食べる楽しさを少しでも味わってほしいと思い、こうした方式を採用しました。これはダメと禁止することは容易ですが、透析患者さんの要望を尊重した上で、どうすればよいかを検討するようにしています」と、患者さん重視の姿勢を語った。食事に関する勉強会は栄養士を中心に行われているが、看護師は透析室と情報交換を行い、体重の変動やカリウム値などから食事に関するアドバイスをを行っている。



栄養士の見守りのもと、介護スタッフから食事指導を受けている患者さん

■ 今後も生活支援における看護のあり方を追及

あしたの丘では、春のお花見をはじめ、七夕、クリスマス会など、施設行事が盛んに行われているが、行事の際には透析患者さんに付き添う介護スタッフに、お酒などの水分摂取に気をつけるようアドバイスし、楽しみは残しながらも、食事への配慮を怠らないという。

徳井看護主任は、「ここで暮らす方々はさまざまな障害を持っていますが、施設に閉じ込めておくのではなく、やりたいことを尊重し、それを実現できるようにスタッフ全員で支援していきたいと思っています。透析患者さんも少し気をつければ他の方と同じように生活できることを、全国の療護施設に伝えていきたいと思います」と今後の抱負を語った。